第3回熊本地方会　活動報告

テーマ　：　地域における医師事務作業補助者の役割
　　~afterコロナ/DXと未来~
開催日時：　2023年6月24日（土）14:00-16:00
開催場所：　天草地域医療センター ヒポクラート
　　現地およびZoom配信

開会挨拶　　熊本県支部　支部長　園田 美樹（熊本医療センター）

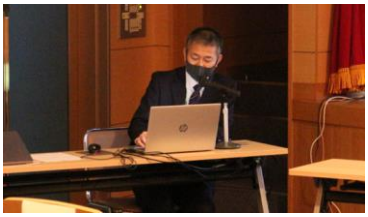
第3回熊本地方会開催にあたりましてご挨拶申し上げます。

全国から多数ご参加くださいまして誠にありがとうございます。本日はコロナウイルス感染症が5類感染症に移行いたしまして、3年ぶりに現地参加も交えたハイブリッド形式で開催いたします。

本日のプログラムは熊本医療センター副院長で当支部世話人の日髙道弘先生と当学会学術アドバイザーの高橋新先生にご講演いただき、地域の中核病院の3施設の実務者の方に事例発表をいただきます。熊本地方会参加によって、医師事務作業補助業務の知見をさらに深めることができたと実感していただき、関係者の皆さまが果たすべきそれぞれの役割などのヒントにされ、一層の推進につなげていただけますと幸いでございます。最後までどうぞよろしくお願いいたします。

講演1　　『当院の医師事務作業補助活動状況~現状と展望~』

座長　　吉仲 一郎 先生（天草地域医療センター 院長、代理：事務部医事課　課長 金田義延）
講師　　日髙 道弘 先生（熊本医療センター　副院長）



＜日髙 道弘 先生＞

＜金田 義延 ＞

当院の医師事務作業補助者（ドクター秘書）は非常勤職員です。年齢分布は40代が最多です。非常勤勤務が都合が良いという方が多いようです。勤続年数は5年以内と10年以上の方が多く二峰化しています。初期研修とOJTの実地研修、定期継続研修を行っています。初期研修はドクター秘書自身と各職場長が指導しています。当院では投薬や注射など医療行為の代行は禁止業務です。業務依頼は、簡単にできるのではなく、会議で決定することになっています。全国でニーズが高い業務を当院でも行っており、医師事務作業補助者のワークライフバランスを保てるよう業務を依頼するようにしています。原則、診療科には複数のドクター秘書を配置し、組織的に業務管理を行い、業務範囲を明確にすることで過剰な負担を回避し、定期的なアンケート調査や個人面談で希望や問題点などの意見を吸い上げ、院内試験による昇格制度で能力評価を行っています。

最近の取り組みとして「放射線検査所見の見落とし対策」、「キャリアラダーの設定」、「くまもとメディカルネットワークでの医療連携」についてご紹介します。放射線検査所見の見落とし対策として、緊急性がない所見があった場合、放射線科読影医が「所見BOX」に投函します。それをドクター秘書が担当医師へ確実に伝達して、見落としがないよう取組んでいます。

また経験やスキルを評価したいということでキャリアラダーの設定をしています。ドクター秘書は15名で共通業務のみ行います。高度技能ドクター秘書18名は経験年数1年以上で試験がありま

す。リーダー4名は経験年数3年以上、指導年数1年以上で共通業務、役職別業務、他部署との連携業務を行います。副主任4名は経験年数5年以上、指導年数3年以上でリーダーより共通業務以外の業務が少し増えます。主任3名は経験年数7年以上、指導年数5年以上で全体的に業務が多くなっており、それぞれで報酬もかわります。

最後に地域医療情報ネットワークであるくまもとメディカルネットワークにおける業務をドクター秘書に行ってもらうために、PKIカードを全員に配布しました。届いた紹介状を来院までにカルテにコピペして受診時にバタつくことなく準備ができます。それまでは未読文書も多かったのですが、現在ではほぼ既読にすることができ、非常に貢献してもらっています。

熊本医療センターのドクター秘書さんは医師の負担軽減等に貢献し、医療の質向上に大きく寄与してくれており、大変感謝しております。

講演２　　『医師事務作業補助者に訪れるDXと未来』

講師　　高橋 新 先生（慶応義塾大学医学部　医療政策･管理学教室　訪問助教
日本医師事務作業補助者協会　学術アドバイザー）

医師の事務作業補助をする職種にはどういうスキルが求められるのか、実務者は何をしないといけないのか、今のポジションではなく、少し先を見て何をしなければならないかイメージできていますか？地域医療構想や医療DXの波が押し寄せています。本日は、医師事務作業補助者の方々が自分の少し先の未来の像に対して近づく機会になればと思います。

医師事務の加算の診療報酬点数は、2008年から直近の改訂まで約3倍近く上がっています。診療報酬点数は国の政策を反映しています。3年以上の実務者の割合が算定要件になったことは、評価が量から質に変わったと読み取れます。明確な配置効果を意識しなければ、実務者の効率的な活用にはつながりません。医師事務作業補助者もEBPM（Evidence-Based Policy Making）を用いて自分たちが働いた成果や効果を検証することが必要です。仕事を評価するのは難しいですが、定量的に数字で評価することを意識します。評価を誰かがやるのではなく、自分のこととして行い、学会に参加し発表をすることです。情報発信はベテランの方だけでなく、誰にとっても重要です。学会に参加すると、自分と同じ悩みを抱える他施設の実務者も多くいますし、横の繋がりを作るには有用です。

医師事務業務の行末は、生成系AIがさらに進化すると診断書や情報提供書、サマリなどの作成方法が変わり、患者さん個別に対応する対話型の予診が可能になるだろうと思います。またデータ連携が進むと症例登録系の業務は入力が不要となるのではと考えられます。情報提供についても地域医療データが連携されていれば不要となるでしょう。そうすると医師とのかかわり方が変わり、医師事務の業務範囲も変わるでしょう。生成系AIは過去の記録からもっともらしいものを抽出するのは得意ですが、今ある情報から新しいものを作ることはまだ苦手です。医療は「人」対「人」なので医師や患者さん、患者さんになる前の国民などの「人」とコミュニケーションをとり、寄り添う予防医療にかかわっていくかもしれません。また、情報化が進むとセキュリティ対策が必須です。セキュリティ部門のみならず、医師などを支援する医師事務にも必要となります。そしてサービス業は、忙しいとパフォーマンスが下がりますので、医師事務が現場でつぶれないようにすることです。肉体的にも精神的にも社会的にも健康な医師事務はパフォーマンスが上がり、医師への支援も高まり、医療の質向上に関与します。

これからの医師事務に期待されるものは「生成系AIを使いこなす」、施設や地域などの「情報活用基盤を使いこなす」、国の政策などにアンテナをはって「医師事務業界を知る」、「人とのかかわりを深める」、激動の時代なので「時代の変化に対して適応する能力」を持ち、「健康、幸福」でいる

事例報告　　医師事務作業補助業務の紹介および地域医療における役割等

コーディネーター　　熊本県支部　世話人　豊田 博信（成尾整形外科病院）
演者1　　中林 秀美 様　（阿蘇医療センター）
演者2　　若木 恵 様　（天草市立牛深市民病院）
演者3　　清田 沙紀 様　（菊池郡市医師会立病院）

各医療機関から取り組みや工夫点、課題、地域医療における役割などについてご発表いただきました。

ご発表いただいた医療機関さんの地域にはそれぞれ特徴があり、高齢者が多く、また近くに家族がいない独居の方も多い地域では、介護主治医意見書作成の際に直接患者さんと面談し、困っていることや生活状況、病状など確認しているそうでした。

また、人材確保において非常に厳しい地域もあり、これは地方における共通課題と言えます。なかには、医師事務作業補助者の業務を行いながら、自身の資格を活かし「両立支援コーディネーター」「カウンセリング」を行っていらっしゃる医療機関さんもありました。

地域の中心的な糖尿病センターとしての役割を担っている医療機関さんでは、糖尿病などの慢性疾患に特化したPHR「Personal Health Record」を活用し、患者さんがアプリで入力した情報をクラウドで管理し患者さんの自己管理をサポートされていました。

今回も貴重な時間とたくさんの情報を共有することができました。今後も頼りにされる医師事務作業補助者となるために一緒に学び、質の高い診療支援に繋げていきたいと思います。

閉会挨拶　　熊本県支部　副支部長　村上 美紀（済生会熊本病院）

本日はお忙しいなか第3回熊本地方会にご参加いただきありがとうございます。お二人の先生方には貴重なご講演をいただき、実務者のみなさまにはそれぞれ事例発表いただきました。ありがとうございました。

来年度は、熊本医療センターで開催を予定しております。次回もみなさまと一緒に学ぶことができましたら幸いです。これで日本医師事務作業補助者協会第3回熊本地方会を終了いたします。本日は誠にありがとうございました。